フィールド・ワーク活動報告

あえてたばこ産業に学ぶ

市　川　政　雄
筑波大学医学医療系

Dare to Learn From the Tobacco Industry

Masao Ichikawa
Faculty of Medicine, University of Tsukuba

学生時代、友人宅で催された飲み会に参加した。飲み会といっても酒はなく、参加者にアフリカ大陸を放浪するバックパッカーが数名いたため、手作りのアフリカ料理が振る舞われた。飲み会の席では車座になって、旅行先での武勇伝に耳を傾け、これまで味わったことがない珍しい料理に舌鼓を打っていた。しかし、こういうときに限って、あっという間に終電の時間がやってくる。翌朝まで粘ってもよかったが、翌日に用事があったため、泣く泣く帰宅することに。最寄り駅までは友人が400ccのバイクで送ってくれることになった。

友人はバイクのカバーを外しながら、「右折や左折をするときはその方向へ体を倒すように」とバイクの同乗がはじめての私に指南した。そして、ヘルメットを私の頭にかぶせた。ところが、ヘルメットに私の頭がなかなか収まらない。友人が頭をかしげながら、私の頭に再度ヘルメットをかぶせなおしたが、これまたうまくいかない。「このヘルメット、小さすぎる」と私が嘆くと、「いや、このヘルメットが小さいというより、お前の頭がでかいんだな」と友人。私はこれまで頭が大きいことで得をしたことは一度もない。ともあれ、終電に間に合わなくなるので、悲鳴をあげながら、ヘルメットに頭を押し込み、駅へ向かった。私がバイクに乗ったのはこれが最初で最後である。

さて、私がここ10数年にわたり訪問してきたラオスでは、バイクが道路の主役である。最近は自動車も増えてきたが、台数でいえばバイクが優勢である。隣国のベトナムほどではないが、あの数には圧倒される。そして、運転の仕方がまたすさまじい。スピード走行やジグザグ走行は当たり前で、歩道を走ったり、道路を逆走したりするから、かなわない。

ラオスでは経済成長とともに道路が整備され、バイク利用者が急増した。道路が整備されると、バイクのスピードが出る。同じ勢いで交通ルールの順守と違反者の取締りが徹底されればいいが、そうはいかない。バイク乗員のノーヘル（ヘルメット非着用）はごく一般的である。ヘルメットをかぶらないのは誰かさんのように頭が大きいから、ということはあるまい。面倒だし、髪型は崩れるし、あの暑さでかぶるのはしんどい、といった理由からだろう。一方、日焼け防止になるから助かるという女性の意見もある。頭と顔全体を覆うフルフェイスがいいらしい。もちろん本当の話である。

ラオスでは年々、バイク事故と死傷者数が増えていた。そこで、政府はバイク乗員にヘルメットの着用を義務づけるようになった。その結果、ヘルメットの着用が徐々に増え、近年では着用するのがむしろ一般的になってきた。ただ、ひとつ気になっていたことがあった。それは、バイクを運転する大人はヘルメットをかぶっているのに、同乗する子どもがかぶっていないことである（写真１）。子どもは大人からヘルメットを与えられなければ、かぶることができない。おそらく、かぶらないことを選んでいるわけではない。だとすると、何だか不公平な気がしてならない。そこで、もう何年も前になるが、バイクに同乗する子どもがどれくらいヘルメットをかぶっているのか（いないのか）を調べることにした。

2011年12月、ラオスの首都ビエンチャン市内中心部の公立中学校で通学風景を観察した[1)]。通学風景を観察したのは、ビエンチャン市内では登下校の際に保護者が子どもをバイクで送迎するのが一般的だからである（写真２）。調査の方法はいたって簡単。調査対象の中学校は幹線道路に面し校門が1つだけある（図１）。そこで、校門の左右にビデオカメラを1台ずつ設置し、校門前の道路の各方向（校門の左右）を、登校がはじまる午前７時から校門が閉まる午前８時半まで撮影した。あとは映像を見ながらひたすらカウント作業である。

映像で確認できた生徒544人のうちバイクで通学していたのは195人（36％）。そのうち、なんと45人（23％）は自らバイクを運転してきていた。また、35人（18％）は同じ中学校の生徒かその他の子どもが運転するバイクに同乗してきていた。そして、懸案のヘルメット着用率は大人で66％、生徒では3％に過ぎなかった。また、大人が運転するバイク106台で、大人だけがヘルメットを着用していたのは69台（65％）に上った。

この調査は一中学校の登校時に一度だけ行ったもので、同じような光景が市内全域でどの時間でもどの時期でもみられるかどうかはわからない。ただ、一中学校の一時点であれ、中学生がバイクを運転し、ヘルメットを着用しないのはラオスの道路交通法に反しているばかりか、大人がそれを黙認しているわけだから、子どもの命

を守るという意識がまったく欠けていると言わざるを得ない。

さて、私たちの多くがそう思うだろうが、そう思ったところで問題は解決しない。わが国にも多かれ少なかれそういう時代があり、その経験から人びとの意識を変えるのがどれだけ難しいかを知っている。だから、人びとの意識がおのずと変わるのを待とうというわけではない。かといって、これまで通りヘルメット着用の有用性を説き、その推進に努め、違反者には罰則を科すという旧来のアプローチを続ければよいのか。いや、それでは進歩がない。では、何をすべきか。

屈辱的かもしれないが、商品のファッション化に大成功をおさめたたばこ産業やファーストフード産業に学ぶことがあるのではないだろうか。巧妙なマーケティング手法とそこにみられる創意工夫によって、たばこやファーストフードが爆発的に広まったように、健康行動をはやらすことはできないだろうか。このような提案は今にはじまったことではないが、ラオスの幹線道路沿いに掲げられたタバコの看板広告を目の当たりにすると、改めてそんなことを思うのである。

文　献

1）Ichikawa M, Nakahara S, Phommachanh S, et al. Roadside observation of secondary school students' commuting to school in Vientiane, Laos. *Int J Inj Contr Saf Promot* 2015；22：111-5.

写真１

写真２

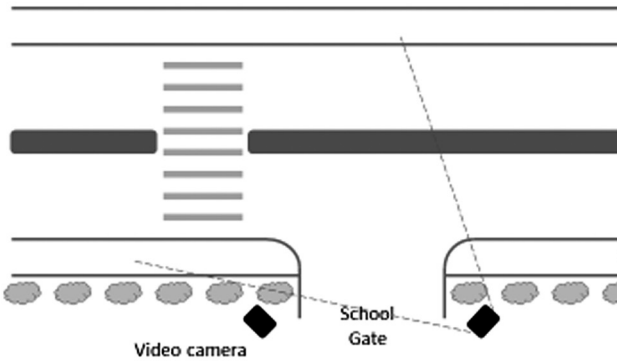

図１　校門の左右には植込みがあり、植込みと幹線道路の間には歩道が敷設されている。